日本GAP

# ニュースレター

1965

5月・6月

# 日本ＧＡＰニューズレター

—１９６５—
5月・6月号目次　　通巻第28号

| | | |
|---|---|---|
| G・アダムスキー氏逝去 | | 1 |
| ア氏を思う | 各国ＧＡＰ | 2 |
| アダムスキーは生きている | アリス・K・ウェルズ | 5 |
| 世にも不思議な物語 | ゴードン・クレイトン | 12 |
| テレパシー開発体験記 | 一ノ瀬　稔 | 18 |
| 金星人とは | G・アダムスキー | 26 |

—なんぴとのみまかりゆくもこれに似て
みずからを殺ぐにひとし
そは　われもまた人類の一部なれば
ゆえに問うなかれ
誰がために鐘は鳴るやと
そは汝がために鳴るなれば　J・ダン

# ジョージ・アダムスキー氏逝去

今春米国東部地方を講演旅行中でありましたジョージ・アダムスキー氏は、去る四月二十三日、ワシントン市の病院で急性肺炎と心臓病のために急逝されました。ここに謹んでお知らせいたします。

なお米国GAP及び各国GAPは今後も活動を続ける予定でありまして、本誌も継続発行しますからよろしく御支援のほどをお願い申し上げます。

一九六五年六月一日

日本GAP

# ア氏を思う

各国GAP

米国GAP本部マーサ・ウルリッヒからの第一報（四月二十四日付）

「お知らせいたします。アダムスキー氏は昨夜ワシントン市において死亡しました。彼は二月下旬以降東部地方へ講演旅行に出かけており、計画が大体に終了しましたので五月八日までには帰宅する予定でしたが、風邪を引いたのが肺炎となり、心臓マヒを併発したということで、長くは苦しまなかったようです。

ウェルズ夫人があと始末をするために今朝ワシントン市へ飛びましたが、出発前に各国GAPへ通知するように言い残しました。世界にとって大きな損失です。（注。マーサはア氏の弟子）

米国GAP本部アリス・K・ウェルズ女史より（五月四日付）

「ジョージ・アダムスキーは死んではいません。彼は私たちの中にいます。あらゆる奉仕活動をすすんで行なってきた彼にたいして、彼の健康状態の如何にかかわらず、惑星間会議は彼に新しい肉体を与えることに決定しました。

アダムスキーの肉体は地球に属するものでありましたから、それは地球へ返されねばなりませんが、彼の英知は宇宙のものでありますので、低い英知の人のように〝生まれかわり〟の径路を通る必要はありません。

今彼がどこにいるかはわかりませんが、たぶん金星であろうという感じがします。その惑星こそ今度の新たな奉仕の生活におけるホーム惑星となるでしょう。彼は宇宙船で他のブラザーズと共に地球へ来るでしょう。そして必要があれば指導的な人々と直接にコンタクトするでしょう。

情報源を持つ私たちは〝損失〟の感じを起こしてはなりません。むしろ〝子供たち〟のすべての必要物を知り給う創造主にたいして喜びと大いなる感謝の念を起こすべきです。

アダムスキーはかつてしばしば「反対勢力は決して私の活動を停止させることはできない」と言っていました。この言葉は私たちすべてにとって正しいものとなるでしょう。

ケアリフォーニア州ヴィスタのGAP本部は従来通りの活動を続けます。コズミック・プレティン（GAP本部の情報パンフレット）は今後も発行され、私がジョージ・アダムスキー財団の理事長として働きます。ですから体験記や情報を提供したい方は本部宛お送り下さい。奉仕機関として私たちのグループを強大な知識と理解の源泉にすることができます。

偉大な道標であったジョージ・アダムスキーの祝福があなたにあらんことを—」

メキシコGAP、マリア・クリスティーナ・デ・ルェダより（五月十九日付）

「アダムスキー氏がクリスマスにメキシコを訪れた件について一月以来お知らせしたいと思っていました。ところが、敬愛する大師の死去に関する恐ろしいニューズをきっかけとして手紙を書く

ことになろうとは思いもよらないことです。私の家族が如何にア氏を愛していたかは皆さんご存知のとおりです。（注。アダムスキーは毎年クリスマスをメキシコのマリアの家ですごすことにしていた）したがって一家が受けたショックはかなり知れないものがあります。このため私は気分が悪くなって数日間寝込んでしまいました。

今年は私たちにとってあまりよい年ではありません。彼のこの前の情報でご存知のように、メキシコ訪問のためにア氏とアリスとジムの乗っていた旅客機は途中でトラブルを起こし、一同は危険におちいりました。私がどんなに気をもんだかおわかりでしょう。（注。これに関する記事は本誌先号に掲載）

ア氏も常にもなくあせっていました。彼はできるだけ早くメキシコで新しい団体を作ることを望んでいたからです。彼は「もうあまり時間がない」と言っていましたが、私はその言葉の意味が理解できませんでした。おそらくア氏はせまり来る死期を予知していたのではないでしょうか。

ア氏一行がケァリフォーニァへ帰ったあと私の長男が病気にかかり、一家は緊張しました。そのあと悲報が舞い込んで私は悲嘆にくれたのでした。私には信じられなかったほどです。私はあなた方ほどに勇気はありませんので、病気になり、まだよくなってはいません。これが連絡の遅れた理由です。

しかし毎年クリスマスにはア氏とアリスをわが家に迎えることができて一家は幸福でした。この大いなる特権にたいして心から〝天の父〟に感謝しています。

ときとして彼がまだ死んでいないような気がすることがありまし。それがせめてもの救いになるのですが、アリスからの手紙を受け取ったとき、この感じを理解することができました。そうです。彼はまだ私たちと共に生きているのです。

これからは彼の教えに従ってより良くなろうと思います。そうすればまた彼に会えるときがあるかもしれません。

私の親友ドラ・バウァー（注。オーストリーGAP主宰者）は「あなたは何度もア氏と一緒にいる機会を持ったのだから大変幸運だった」と言いましたが、たしかにそれには幸運以上のものがありました。また彼は私の生涯でこれ以上のものはないと思われるようなすばらしい贈り物をくれました。それはかなり以前に彼が描いたイエス・キリストの肖像画です。彼はすてきな画家でもありました。そのイエスの肖像画のそばにいれば心地よくなり、彼の近くにいるような気がします。

『追伸』クボタへ

あなたからしばらく連絡がありませんが、元気で活動していることと思います。美しい絵ハガキを送っていただいたのに礼状を出さなかったことをお許し下さい。（注。オリンピックの絵ハガキを大量に送った）しかし前記のとおり私が心痛していたことはおわかりでしょう。あなたのことを決して忘れていないこともわかって下さい。

ア氏にかわるほどの人は目下この世界にいないと思います。私は心から悲しんでいます。

敬愛してやまない大師は突然私たちから去って行きましたが、それは〝永遠に〟ではないと思います。そう思いませんか？

あなたが彼に全然会う機会を持たなかったというのは気の毒で

す。彼を知ることは彼を敬愛することでした。しかしあなたが心から彼を敬愛していることは私にもわかっています。

早く手紙を下さい。あなたからの手紙を受け取るととてもうれしいのです」

デンマークGAP、ハンス・ペテルセン少佐より（五月四日付）

「われらの敬愛する友がこの世を去ってから、私たちはしばらくからだを休めて今後の処置について決める必要があります。

あなた方のなかには全く落胆した人もあるでしょうが、ジョージのような偉大な人は完全に義務を果たすまでは死なないことを忘れてはなりません。これは、ジョージの義務は終わったので彼は創造主のために別な奉仕の世界へ行ったという意味です。その点において私たちは喜ばねばなりません。ジョージはきわめて長い年月を人類に奉仕しました。私たちの見得る限り彼は立派に試錬に合格したのです。彼がこれから行なおうとする奉仕は高次なものであり、創造主の意志により近いものとなるでしょう。

あとへ置きざりにされたと感じるのは恐ろしいことですが、これは進化の法則です。私たちは結束して事に当たり、常に楽しく、強く、勇敢で、親切であり、努力して計画を遂行しなければなりません。

ジョージがだれかを後継者に任命したかどうかはわかりません。私には任命したとは思われません。目下彼に匹敵する人が見当らないからです。彼は偉大すぎました。それともジョージがだれか他の人に後事を託していたとすれば、皆はその人に従い、計画を遂行するように援助したいと思います。

とにかく詳細な情報が到着するまではジョージの遺志に従って真理を伝え続けようではありませんか。また、互いに建設的な意見を出し合うことにしたいと思います。

一応落ち着いて、ジョージを休ませてやりましょう。彼を私たちの心にとどめて、創造主の導きの下に永遠の道を行かせることにしようではありませんか」

C・A・ハニーより（彼の機関誌五月号）

「世界の大衆にUFOの真実の物語をもたらした最大の人ジョージ・アダムスキーは逝った。彼はワシントン市の病院で四月二十三日に他界した。その死因に関してはさまざまの情報がある。肺炎が原因であったという人もあるし、検死の後に死因が判明するだろうという者もある。これ以上詳細な情報は入っていない。或る新聞によればアーリントン墓地で土葬にされたというし、火葬にされたという新聞もある。正確な情報が入ったならば当方の機関誌に掲載するつもりである。

かなり以前に彼が始めた仕事は彼の名と共に滅することはないだろう。それは私によって過去四年間続けられたように今後も続けられるだろう。この生涯におけるアダムスキー氏と私との交りはこれが最初ではなかった。また今後数百年間も続くであろう」

# アダムスキーは生きている

アダムスキー財団理事長
アリス・K・ウェルズ

一九六五年四月二十三日の夕方、メリーランド州シルヴァースプリングズから電話がかかりましたが、それによりますと「アダムスキーが心臓病のために病院へかつぎ込まれた。容態判明次第に詳報を知らせる」ということでした。そのあとまた電話がかかり、「医師団はあらゆる応急処置を施したけれども本人は反応を示さず、ついに死亡した」と一医師が伝えてきました。これは私にとってさほどのショックではありませんでした。なぜならこの事はいつか起こるかもしれないとかねてから申し渡されていましたし、死後の死体の処置について彼ははっきりと語っていたからです。

四月二十四日の朝、私は彼の遺志に従うためにワシントン市へ飛びました。死体は彼の望み通りに火葬にされ、灰は骨ツボに入れられ、ヴァージニア州アーリントンのいわゆるアーリントン墓地に埋葬されました。こんな所へ埋めるよりも彼としては灰を野原にばらまかれるほうを好んだことでしょうが、これは法律で禁じられています。葬式は行なわれませんでした。フォートマイアーから来たデイヴィッド・F・テイト師によって墓地で簡単な祈りがとなえられただけです。

「今私たちはここにつどい、あの偉大な神の子ジョージ・アダムスキーに親しく接して共に働く特権を与え給うた万物の創造主にたいして深甚なる感謝の念をささげます。肉体は灰と化して元の大地へ帰るのであれば、私たちもジョージ・アダムスキーがかくも気高く生きる根源とした〝宇宙の因〟に一同の生命をささげまつることにいたします。

〝宇宙の因〟の従順な子によってきわめて簡潔に説かれた真理を[illegible]人類にあたらしい[illegible]知恵を[illegible]与え給わんことを天の父に祈ります。

ジョージ・アダムスキーを知ることによって私たちの生命は豊かになりました。彼は耳を傾ける人すべてに〝宇宙の英知〟の理解をわかち与えたからです。

自然の法則に従いさえするならば、ジョージ・アダムスキーの名は混乱のさなかにおける理解の象徴であり、至福と永遠の生命の約束を意味するものでもあります。　ああめん」

土星における十二人会議に関する報告〝土星旅行記〟をアダムスキーはかつて公表しましたが、彼はその後一九六四年にメキシコのサンホセプルアでこれと同じ会議が行なわれた際に再び出席しました。しかるに、彼がこの太陽系会議のメンバーであったことを認めている人が一体どれほどいるでしょう？　これは高度に宇宙的知識を身につけた人々のグループなのであって、太陽系の各種の状態を検討しては各自の惑星の住人にその変化を知らせ続

ける人々の集まりなのです。宇宙船で航行するブラザーズもこの地球上にいるブラザーズもこの変化の情報を伝える連絡員です。

あらゆる義務の遂行に確固たる忠実さを示したアダムスキーにたいして会議は彼に新しい肉体を与えることに決定しました。古い肉体は地球のものでありましたからそれは地球へ返されましたが、新しい肉体で仕事を続けるのに英知の中断はありません。

アダムスキーは幼児として生まれかわるのかという質問を受けましたが、私の答えは「ノゥ」です。彼ほどに個人の英知が〝宇宙の意識〟を自覚しているならば、幼児として生まれかわることは必ずしも必要ではありません。宇宙の法則を理解すれば、これは何ら空想じみたことではありません。

反対勢力が自分の活動を停止させることはないとアダムスキーは何度も言っています。

彼の他界を悲しむ必要はありません。彼は今なお私たちのなかに生きていますし、ブラザーズは依然として私たちの生活を指導しています。ゆえに仕事を継続できるように新しい肉体を彼に与えた創造主に感謝の念をささげたいと思います。

私はときどき一般の円盤研究グループは一体何を証明しようとしているのかと思うことがあります。というのは彼らは科学者や宗教家と同様に〝人間〟の意見や現象の結果だけを取り扱っていて、〝因〟というものを追求しないからです。円盤を目撃した人はだれも円盤の存在を信じますが、しかもそれが間違いのないことを証明しようとします。なぜでしょう？　私たちは、他の惑星から来た宇宙船が地球の上空にいることや、この進化した惑星人が宇宙を航行する方法を学び取っていることなどを知っています。しかし地球人は惑星人が発見した原理を学ぼうとして充分な時間と労力を払っているでしょうか？

ケアリフォーニア州ヴィスタのGAP本部はこれまで通りに活動を続ける予定です。アダムスキーの業績の啓蒙活動に終りはありません。現在もなお世界各国に強力な組織網があって、各自が使命の遂行に懸命になっています。私自身はアダムスキー財団の理事長として働くつもりです。今後の連絡はアリス・K・ウェルズ宛にして下さい。

『アダムスキーの最後の活動に関する各地からの報告』

ヴァージニア州アレグザンドリアのフレッド・ステキングより。

「四月二十日の火曜日に私はアダムスキー氏にむかって、最近ソ連が宇宙空間から七〇〇〇メガサイクルで百日ごとに来る電波信号をキャッチしたことについて尋ねてみました。すると彼はブラザーズがちょうど数日前に洩らしたという話を伝えてくれました。以下はその内容です。『この太陽系には十二個の惑星があり、更に十二の太陽系が一つの島宇宙を形成している。（注。従来天文学でいわれている島宇宙とは異なる）この島宇宙内の惑星の多くは宇宙船を持っていて、しかも宇宙空間は船が沈んだりする大洋に比較できるので、ブラザーズは宇宙航行の目的で信号を放送する信号所を設けているが、これは島宇宙の中心に位置している。これがソ連のキャッチした百日周期の電波信号である』」

メリーランド州シルヴァースプリングズのマドライン・ロドファー夫人より。

「一九六五年一月十二日午後十一時のニュースの時間に、アダムスキーが一九六四年十月上旬に自宅上空の円盤を撮影した記録

映画が、WTOPのCBSテレビで放送されました。このときはキャピトル・ヒル地区で十二ないし十五機のタマゴ型物体が自由自在に空中を飛び交った目撃事件のニュースも共に放送されましたが、飛行機がそれを追跡しているのが画面に見えました。これは一九六五年一月十一日午後四時二十分に発生した事件です。一月十三日に私はアンダスン上院議員の事務所を訪問し、そこの人々に私が（ロドファー夫人が）撮影した円盤の記録映画を見ることに関心はないかと聞いてみましたら、大いに関心があるということでしたので、一月十四日に上院の航空宇宙科学委員会の主要メンバー連に公開しました。これは、アダムスキーの惑星人とのコンタクトが真実以外の何物でもないという証明にもなることが全員に理解できたようです。上映後の会談で、アダムスキーと惑星人の友人を連れて来ることができるかという質問が出ましたので、あなた方の意図がまじめなものであるならば何とかなるだろうと答えました。[illegible]がないが、空軍は興味を持っているかもしれない』と知らせてきましたので、空軍にアダムスキーの講演と記録映画上映の件について申し入れしましたが、まだ返事は来ていません。しかし三月十一日にロックヴィルの市民センターにおける会で空軍関係者が数名入っているのが目につきました。彼らは円盤の正体については知らないと称していましたが、その夜の会でかなりの知識を得たものと思っています。

三月九日午前九時から十一時までメイフラワー・ホテルで記者会見が行なわれました。また各地で講演と映画の会が開かれた後、アダムスキーは四月十六日（金曜日）に再びここへ（シルヴァースプリングズへ）帰って来ました。

私が撮影したフィルムは二月二十六日午後、シルヴァースプリングズの丘にある自宅前を超低空で飛んだ一機の円盤を撮ったものです。このフィルムは高い地位にある下院議員たちに見せてありますが、その人々の氏名を今ここで明らかにするわけにはゆきません。しかし政府の重要な地位にある人々がアダムスキーや私の撮った円盤記録映画を見ていて、この内容を全世界に知らせるのに援助せよと一般人から要請されているということは断言できます。多数の政府要人が各地からアダムスキー問題に関して照会や陳情を受けていますが、その中には大統領や副大統領も含まれています。

現在私のフィルムはアダムスキーのフィルムの中に加えられて編集されています。五月六、七日にイリノイ州ピオリアで開催予定であったアダムスキー講演会には、かわって私が行くことにしました。

ニューヨーク州ロチェスターのウィリアム・T・シャーウッドより。

「三月十七日にロチェスターの第一ユニテリアン教会におけるアダムスキー講演会に出席するため、激しい吹雪をついて六百五十人の市民がつめかけました。これは定員を超える人数で、会場では聴衆の熱意にこたえて記録映画が二度上映されました。講演会の始まる三十分前にロチェスター市の雪空に青白い閃光がきらめいたのを多数の市民が目撃しましたが、音響は聞こえなかったということです。と同時に商店街の八個のネオンサインが消えてしまいました。アダムスキーの説明によれば、これは円盤が出現

したためであるということです。

翌日私とアダムスキーは、〝トム・デカー日曜ナイト・ショウ〟で使用されるインタヴュー番組をヴィデオテープに撮るためにWROCテレビ局へ行きました。ここでちょっとした事件が起こったのです。そのインタヴューの内容の殆どはアダムスキーが一九五二年十一月二十日に金星人と最初に会見したときの模様に関する事柄でしたが、途中でトム・デカー（注。有名なテレビ司会者）が「だれか他の人で似たような体験を持ったと称する人がありますか」と尋ねましたので、南アフリカの一婦人がアダムスキーの体験を立証する情報を伝えた手紙がちょうど来たばかりなので、その内容を私から話そうと申し出ましたところ、まさにそのとき、ヴィデオテープの動きがひとりでに停止してしまいました。何度やってもだめなのです！　するとアダムスキーは微笑しながら「その手紙の内容を洩らすとおそらく本人にトラブルが起こるからだろう」と言います。あとでその局の技術者たちが、ヴィデオテープレコーダー中の数個所の部品が帯磁していたので、正しく作動させるにはその磁気を除かねばならなかったと語っていました。とにかくそうした奇妙な中断のために番組の編成は後日にまわされました。今度はゲストとして一天文学者が出席しました。デカー氏はアダムスキーとこの天文学者の両方にたいして立派な仕事をやりましたので、視聴者の反響は大変なものでした。各地から多数の手紙がWROC局へ殺到し、この種の番組に関心があることを示し、他の惑星の生命についてもっと知識を与えよと要求してきたのでした。

或る日アダムスキーはイーストマン・コダック社に迎えられました。（注。イーストマン・コダックは写真材料の製造販売会社として世界屈指）この会社は長いあいだアダムスキーの撮影したフィルムの現像と複製を一手にやってくれたのです。ここで彼は最近まで使用していたエレクトラ・カメラの設計者と会見しました。そのあと副社長が現われて、コダック社主催の歓迎会に共に出席できないことを心から残念がっていました。この副社長は、三月の始めにアダムスキーがロドファー夫人の家にいた当時、一機の円盤が空中に停止しているのを同夫人が撮影した映画に異常な興味を持っている人です。

ロチェスター・デモクラット・アンド・クロニクル紙の科学記者とアダムスキーとのすばらしいインタヴュー記事が三月十六日付の同紙に掲載されました。

シラキューズで新しく結成されたUFOグループにたいして、アダムスキーは三月十九日に講演を行ない、続いて二十二日と二十四日にはバファローのクラインハンス音楽ホールで八百人を越える聴衆にも演説しました。バファローの大きな放送局（WBEN？）から放送されたラジオ・インタヴューはもっと多くの人々を感動させました。（シャーウッド注。私はバファローの講演についてはこれ以上詳細を知りません。バファローの各講演会は或る〝理解ある〟グループが主宰したということを知っているだけです）

各講演会のほかにアダムスキーは私的な午餐会と晩餐会に招待を受けています。これに出席する栄に浴した人々にとってこれはきわめて価値ある体験でした。というのはその際のアダムスキーの話は私たちがこの惑星上で長く思いこがれてきた良き生活法に

関するものであったからです。

さてロチェスター・デモクラット・アンド・クロニクル紙は五月五日付でアダムスキーの死去を左記のように報じています。

『勇気ある人ジョージ・アダムスキー！

数日前一人の偉大なる人間がこの地上から静かに去って行った。その名ジョージ・アダムスキーの文字がアーリントン墓地の墓に記されていることを知る者はまだ少数である。

先日短時間ながら彼はロチェスターを訪れた。彼を支持する人々は、市民が彼を大歓迎し、本人がそれにたいして深く感謝したことを知れば喜ぶであろう。

冷淡、不信、そしてときには悪意の大波さえ押し寄せるさなかにあって、正義のために不屈の勇気を持った人の思想には高貴なるものがひそんでいた。

他を非難することなく、自己憐憫のための泥仕合も行なわず、ただ真理と愛にのみ反応を示し、宇宙の調和と人間の生活の神聖さを意識して、[illegible]、無我の奉仕の哲学を伝えてその通りに生きたのである。

アダムスキーの偉大さとその深遠なる意義を考えて、われわれはその大きな損失を嘆き悲しんでいる。しかもわれわれに課せられた新しい責任は重大である。宇宙的な生き方をするための青写真を彼はわれわれに遺して逝ったからである』」

マサチューセッツ州ノースボロのアリス・B・ポマロイより。

「三月二十九日から四月五日までのアダムスキー氏のマサチューセッツ州訪問は多くの点で意義深いものがありました。これは彼が地球上に在住した期間の終りに近かったものですから、私たちはひとしお彼にたいする追憶にふけっています。

講演会の前に、各新聞に写真入りで非常に好意的な紹介記事が三種類掲載されましたが、これは過去の反響からみて心温まる態度でした。

ウースター市にあるWTAGラジオ局のジュリー・チェイスとマイクル・キャリガンから彼は温かく歓迎されました。アダムスキー氏はかつてここの番組〝電話で質問〟に出演したことがあり、それはこの放送局の番組中では最上のものだと聞いていたのですが、これは本当でした。ウースター・イーヴニング・ガゼット紙のジェラルド・ゴギンズ氏がそこにいて、私たち一行がそこに到着したとき時間の許す限り彼と話し合いました。

その夕方晩餐会へ案内するために彼の宿舎を訪ねたら彼は次のように語りました。ゴギンズ氏はアダムスキー氏の好意的な写真入り紹介記事を書いたのですが、ア氏[illegible]これを見ていませんでした。ロビーに彼が帰るとたちまち大騒ぎになって人々が争ってア氏に話しかけようとしたことはいうまでもない。あとでその記事を読んだア氏は、これは米国でこれまでに書かれたもののうちで最上の紹介記事だと言っていました。新聞が一般人に真実を伝えるようになったのは何といっても喜ばしいことです。

続いてマサチューセッツ州ローウェル市のWCAT局でモーリス・コーヘン氏とその仲間によってラジオ番組が放送されました。出演した人々はアダムスキー氏の話に非常な興味を持ったので、予定の時間をだいぶ超過して放送が続けられました。

ウースター記念小劇場で行なわれた講演と映画の会のために、或るホテルは満員になったということです。一般市民は好意的で

大きな関心を示していました。各新聞社やラジオ局から来た記者たちはアダムスキー氏の周囲から離れようとはしませんでした。

数回にわたる非公式な会合も行なわれましたが、その中にはロードアイランド州ウーンソケット市の会合も含まれています。これは〝話題の事件〟誌編集部によって企画されたものです。この人々は親切で、この雑誌にアダムスキー氏の体験を載せたりしていますが、次号はア氏追悼特集号にするということです。

アダムスキー氏はここに滞在していたあいだに〝他の惑星の人間に関する真相のための聖戦〟と題する一文をものして印刷しました。彼はこの文章については楽観的だったようで、大衆に真実を伝えるのに役立つだろうと考えていました。このパンフレットを行く先々の講演会場で聴衆に配布しようと計画したのです。入用な人にはまだコピーがあります。

最後の会合は宇宙哲学と生命の科学の講演でしたが、その間ブラザーズが存在することがはっきりと感じられました。アダムスキー氏の言葉が真理の光に輝いていたからです。この地区へア氏が来て以来短時日のあいだに同好者が集まり、三つのグループができて定期的に会合し、〝生命の科学〟の教えを研究し合っています。目下第四番目のグループが結成されようとしています。したがって真理というものは良き生活法を求める人にはだれにも伝えられてゆくでしょう。アダムスキー氏がニューイングランド地方の人々にもたらした祝福に私たちは心から感謝しています」

アダムスキー氏が撮影した記録映画がワシントン市で公開されてから反対勢力の動きは活発になりました。彼らは一般大衆に真実を知られたくないからです。或る自称円盤研究家が、新聞、ラジオ、テレビはアダムスキーに時間を与えるなと書いたパンフレットをばらまきましたが、こうした妨害にもかかわらずアダムスキーの講演は各地とも大成功で、ただデトロイト、ピオリアでは大衆にもっと知識を伝える必要があると感じただけです。しかし的はずれな結果は見られませんでしたので、アダムスキーは予定通り五月上旬にケァリフォーニアへ帰ることにしていたのです。

アダムスキー撮影の円盤記録映画を見たい方は、もう少しお待ち下さい。編集し、多くのコピーが出来次第に有料貸出しをいたします。これは本人の計画でもありました。というのは彼一人でフィルムを持ち歩くのは大仕事であったからです。そのフィルムを解説した録音テープはロドファー夫人が製作することになっています。メリーランドからあまり遠くない場所ならアダムスキーが使用したフィルムを同夫人が持参して公開します。

『質疑応答』

問　コズミック・プレティン（注。GAP本部の情報パンフレット）は今後も続いて発行されますか。

答　発行します。

問　その後アダムスキー氏の著書が何か刊行されましたか。

答　刊行されていません。あまりに多忙なために時間の余裕がなかったからです。

問　メキシコに建設予定の学園はどうなりましたか。

答　これはブラザーズの計画の一部です。ゆえに時が来れば必ず

実現するでしょう。

問　メキシコのユカタン半島への探険旅行は行なわれますか。

答　これもその計画の一部でした。ですから忍待強く待って状況を見る必要があります。

ブラザーズの計画は一人間の生涯中だけに限られるものではありません。それは永久的なものです。ジョージ・アダムスキーは知識と知恵という富を、それを望む人すべてに遺してくれました。

〝父〟の従順なる召使いの祝福があなたに降りそそいで、人生の行路においてあなたを強くし、導かんことを祈ります。〝一つの因〟の中に結束した私たちは兄弟愛の確固たる力を打ち立てることにしようではありませんか。それはやがて世界に拡まるでしょう。そうすればアダムスキーの名は空しくならないでしょう。

（22頁　）

それを持っている人の波動が急速に私の頭部から脳ずいを通過するのがはっきり認められました。それからというものは、私自身がものすごく冷静であることが自分で分った位です。そして私自身に向かって来る波動はことごとくキャッチされた程でした。こころみにその例をあげます。それはその日のことですが、確かその日の一時か二時頃でしたか、私の知人のYさんから電話がかかってきました。その時私はYさんから電話があると思った瞬間に電話が来ました。そこでYさんですかと言いますと彼女はびっくりしました。そして次の瞬間彼女から観喜の波動が私の胸部から感受されたのです。私はテレパシーの最初の実験がカラーによるものであったせいかもしれませんが、その精化された想念波動を感受しているあいだ中、青く澄み切ったある景色の中に金色の太陽光線がきらびやかにただよっている状態の中に自分の存在を認めておりました。ここでもやはり二重の世界にいる感じがしました。このように、この日は反覆の原理を応用して、意識と一体になろうとしてそれを確信した時に起こった出来事なのでした。このことは先生がどのように感じられるか分りませんが、私の身で感じたのですから私にとっては貴重な体験でした。

次にこれは二月中旬頃であったと思います。私の友人で富山県から上京し、早稲田大学商科三年のO君が訪ねて来ました。例の通り私は彼に何か色を頭の中に浮かべてくれないかと言いますと、彼は青、赤、紫、ピンクと次々に浮かべたので、私は次々に答えました。確か十二色位彼は浮かべたと記憶していますが、たった一つ違っただけで、あとは全部適中しました。この頃はどんな人にやっても適中する自信がありました。更に私は今度は、彼の小学校、中学校、高校時代どのようであったかを彼に思い浮かべるように言いました。先ず小学校の頃はどうであったかについてやりました。私は彼の小学校時代のことについて次のように言ったのです。

君は泣き虫であった。それに絵が上手で、国語がいつも悪かったね。そして小学校五年頃一人の女の子とよく遊ぶようになったね。又音楽も大好きで、それも独唱が好きで、一回学芸会でやったのではないかと言いました。これらは私に浮かんでくる物事すべてを言ったにすぎませんでしたが、これは全部適中しました。

（以下次号）

# 世にも不思議な物語

## —第一部　ブラジルの農夫の体験—

ゴードン・クレイトン

長いあいだブラジルとアルジェンティンはUFOの激しい活動の中心地であった。そこには多くの目撃や出来事があったが、次の事件ほどに驚くべき例は他にない。

ブラジルの資料から私が翻訳し、要約した次の記事は、たしかにかつてないほどに最もセンセイショヌルなUFO事件である。私は過去二年間それを調査してきて、もっと証拠が出てこないものかと期待していた。また正直に言うと、その物語を私が信用することに反論が起こりはしないだろうかと恐れていた。しかし現在はその物語の説明を容易にする詳細な情報を入手している。ところで、この奇怪な物語を不快に思われる読者に先ずおことわりしなければならない。すなわちこの事件は読者によってはイヤらしい、またはゾッとするようなものかもしれないが、私自身は事実だと信じているし、真相が何であろうと、それに一応大胆に直面するのはよいことなのである。

これに関して私が所持している主な情報源はリオデジャネイロの〝ブラジル空飛ぶ円盤研究会〟発行の機関誌一九六二年四月、七月号である。これを送ってくれた発行者のW・ビューラー博士には負うところ大なるものがある。（注。ビューラー博士は南米におけるアダムスキー派の円盤研究家として著名な人です。訳者久保田にも長く情報を送り続けています。当方も右の機関誌を入手しました）

ブラジルは世界で最も大きな国の一つで、実際には米国よりも大きく、未開発の最も豊かな資源を秘めた地域の一つを含んでいる可能性がある。隣国のアルジェンティンと同様にブラジルにも驚くほど多数の円盤目撃や着陸事件が発生している。ブラジルの高名な円盤研究家オラヴォ・フォンテス博士は一連の記事〝UFOの乱れ飛ぶブラジル〟（注。かつてフライイング・ソーサー・レヴュー誌に連載された）の中で、ブラジルの防衛や通信機関の便宜のために〝訪問者〟たちは見たところ軍隊組織的な偵察を行なっているらしいと述べ、更に多数のブラジル人は近いうちに侵略が始まるものとみている旨を明らかにした。

ここに述べる物語は一九五七年十二月十五日の真夜中に発生した事件で、現場はブラジルの奥地、西側国境付近の或る場所である。ビューラー博士は正確な地点を明らかにしていないが、英国領事として数年間をブラジルですごした私の知識からすれば、現場はポンテポランにちがいないと思う。そう考えるに至った理由はこの記事の第二部で述べることにしよう。

この事件が発生してまもなくブラジル空飛ぶ円盤研究会は、政府の機密調査機関が異常な事件を調査しているという噂がリオデジャネイロに流れているのを聞いた。そこで会はついに自分たちで調査する立場にたてるほどの情報を入手したのである。かくて

一九六一年七月にビューラー博士は自らいま一人のメンバーM・P・A博士と共に（この人の氏名は明らかにしてない）ブラジルの奥地を目指して出発した。目的地はリオデジャネイロから千五百キロばかり離れた場所であった（ポンテポランはリオから大体その距離にある）。その旅行は三十六時間続いたが、途中五本のバス路線と一そうのフェリーボートが使用された。

その旅行の目的は彼らの報告書にA・V・Bという記号で記されている一人の若いブラジル人農夫に会うことにあった。本人の氏名は不可解な理由で秘密にされていた。その後本人をポルトガル名〝アドヘマール〟と呼ぶことにしたのである。もちろんこれは本名ではない。

まじめな青年だと説明されているこの農夫は最も近い村から五キロばかりの所に住んでいる。彼は予定通り二人に会うために自分の馬に乗って村へやって来た。最初二人はこの男が内気で、四年前の体験を詳細に話すのをひどく嫌がることを知ったが、説得してついに話させたのである。その体験というのは全く奇妙なものであったため、本人は当時一緒に住んでいた両親や弟にさえも洩らさなかった。ビューラー博士らと会った頃にはすでに結婚していた。

その土地は十二月になると極端に暑くなる。あまり暑いのでアドヘマールと弟は夜に働いた。トラクターを運転して、河のそばの平野の畑を耕すのだ。

一九五七年十二月十四日の午後十一時頃、兄弟が畑仕事をやっていたとき、アドヘマールは弟に呼びかけて空中に一個の光点が見えることを知らせた。二人が畑の端でトラクターの方向を変えるごとにその光点も位置を変えた。すると次第に近づいて来るので兄弟は恐ろしくなり、トラクターからスキをはずして家に向かって逃げ帰ったのである。

次の日の夜、またアドヘマールは畑で仕事をしていた。今度は一人だ。すると真夜中に一個の〝星のような光る物〟が北方から急速に接近して、数秒後に畑の上空百フィートの位置に停止した。びっくりしたアドヘマールは器具類をまとめて家に向かうことにし、トラクターからスキを取りはずす油圧装置を操作し始めたが、これが作動しないのだ。

アドヘマールが必死になってそれと取り組んでいるうち、トラクターのエンジンもとまってしまった。すると空中に浮かんでいた物体が急降下して、トラクターから二十メートル離れた所に着陸した。おびえきった農夫は二人の〝人間〟が物体から出て自分の方へ走って来るのを見た。すわ大変とばかり彼はトラクターを飛び離れて逃げようとしたが、二人の〝人間〟は背後から彼をつかまえてしまった。そこでかろうじて一人を頭ごしに投げ飛ばしたが、更に新手が二人かけつけて彼を捕え、ついに五、六名の人間が手足をおさえつけてしまった。当初は激しく抵抗したものの、相手が大勢では暴れるのも無駄だと知っておとなしくなってしまった。しかし一対一なら彼らは自分ほど強くないことがはっきりわかった。

捕えられた農夫は物体の方へ連行されてハシゴを昇り、ドアーを通って円い室内へ入れられた。そこは高さ五、六フィートで幅は六、七フィートある。この室の床の中央から天井へ一本の柱が貫いていて、周囲の壁には四角な穴（複数）があった。ちょうど

電気装置にあるような穴だという。また三本脚の固定テーブルがあって、その上に一個の器具があった。ビューラー博士はリオデジャネイロの或る人からその器具について説明しないようにしてくれと依頼を受けたという。これはこうした器具類に関して今後どこからか報告があった場合にこれと照合することによってその報告の信憑性を調べるためである。

さて連中はただちにアドヘマールのあごの突き出た部分の付近二個所に柔軟な注射器をあてがった。明らかに彼の血液を取るためである。次に彼らはアドヘマールの服が裂けないように注意深くボタンをはずしながら信じがたいほどの早さで彼の服を脱がせ始めた。

続いて彼はドアーを通って別な室へ導かれたが、その中の唯一の家具はプラスティック材料を使用した寝台であった。その上に横にさせられた彼のからだ全身は一種のスポンジでしめらされたが、それには気分が爽快になるような液が含めてあった。アドヘマールは最初これはからだをきれいにするためだと思った。彼は汚れていたからだ。

最初の室にいた時間は五分間位と思われたが、二番目の室ではものの二十分も放置されていた。だれもやって来ない。すると突然強いにおいが室内にただようのに気付いた。次第に吐き気をもよおして気分が悪くなってしまった。

別な室に通じる三番目のドアーがあったが、それが開いて二人の人間が一人の少女を連れて入って来た。その女の身長は四フィート八インチから五フィート位である。二人は女だけを残して出て行った。微笑しながら女は両腕をひろげてアドヘマールに近づいて来た・・・・・・・・・・・・・・。

このときの模様をビューラー博士に語ったときアドヘマールは「あとから考えてみてもどうもよくわからない。なぜなら女が入って来るホンのちょっと前は吐き気がして恐ろしかったのに、女が二人の人間と一緒に現われたとたんに不快な気持が消えたからです」と言っている。始めの不快感にかわって興奮した気分が起こってきたのは、からだに塗られた液体と何かの関係があるのではないかとも言う。

女は薄い金髪を持っていたが、まつ毛もまゆ毛もなく、ただわずかにきわめて細い白いまゆ毛らしきものがあるだけで、からだには毛が生えていなかった。耳は小さくて、あご、くちびる、鼻などは形よくととのっており、目は中国人のようで（注。両端がつり上がっているという意味か）、ほお骨はスラヴ人のように突き出て、歯は白くて形よく並んでいた。体重は八十ポンドと思われた。

やがて女は出て行ったが、〝出来事〟のあいだ中一言も発しなかったという。ビューラー博士はこの部分をできるだけ詳細に聞き出そうとしたが、アドヘマールは恥ずかしがって当惑しきっていた。

彼の話は続く―。女がドアーに近づいたとき、それは自動的に開いた。単純な農夫なので如何なる仕掛けによるものか見当もつかなかった。

女が出て行ってから彼は衣服を取りに最初の室へ引き返した。そこで自分で着ると、一人の乗員がやって来て外部のプラットフォームへ連れ出した。そこは各室の床と高さが同じだった。

さて彼は周囲の状況を見てとることができた。五、六人の乗員がいたが、皆一様に白い、からだにピッタリ合った〝金属のウロコ〟のついた服を着ていた。彼の両手は畑の格闘の際にこのウロコによって傷ついていた。各乗員は幅の広いベルトをしめており、その正面から赤い光を放っていた。足には粗末な白いクツをはいていたが、アドヘマールが翌日柔らかい地面で見た足跡から判断すればカカトがないようだった。彼らの手には丈夫な手袋が着けられ、頭には大きな不透明なヘルメットをかむり、目の位置に水平な小さなすき間があった。背中には小さな突起部から平たい金属の管が出てヘルメットの両側に連結していた。

アドヘマールは彼らの顔を面と向かって見ることはできなかった。言いかえれば、どんな顔をしているかは全然わからなかったのである。例の女に似た人間だったのかどうかはわれわれにはわからない。

乗員たちは彼に話しかけなかったが、彼らのあいだではカン高い調子の言葉で話していた。アドヘマールは少なくともそれがシリア語や日本語でないことは断定できた。この二ヵ国の言語なら響きからしてそれとわかるほどに聞きなれていたからだ。（注。ブラジルには日本人が多いからだろう。）

その人間たちは小柄で、彼の肩にやっととどく程度だったが、例の女はまだ小さかった。これについてビューラー博士とその仲間は、二人とも（博士ら自身が）身長五フィート七インチだが、アドヘマールはそれより少し低いと述べている。

さて話はチン入者たちの〝飛ぶ機械〟に移る。アドヘマールの語るところによれば、最初それは河岸から五十ヤード離れた地点に着陸した。このため数マイル離れた自宅へ帰る道を遮断されたのである。大声で助けを求めようとはしなかった。そんなに距離があっては無駄であることがわかっていたからだ。

彼はその機械の内外を照らす光源が何なのか理解できなかった。その機械に関する彼の説明は奇妙なものであるが、私には（筆者クレイトンには）これまで集めたUFO目撃記録の内容とよく一致するものがある。それは〝鳥のような構造〟だった。高さは九ないし十フィートばかりあり、下部には更に十ないし十二フィートもある三本の脚があった。各脚の厚さは約十二インチで、地面に接する部分は広くなっていた。

機械の本体は長さ五十ないし六十フィートあり、緑色の光を放つ先のとがった前部が突き出ており、更にそれより短い平行な突起部が前部の両側に一対付属していて、両方とも先端付近にオレンジ色の光を放っていた。本体の両側には〝板のような形〟の短い突起部があった。この突起部の正規の姿勢は水平のように見えたが、機械が離陸したときはそれが三十度傾いたのがわかった。

本体の上部には大きな丸屋根があった。厚さ十八インチで幅は約三十インチある。これは絶えず回転していて、着陸していたときもそうであった。しかも風を起こしていて、近くに立っていた農夫に感じられるほどだった。離陸し始めたときはこの風が嵐のようにすさまじくなった。熱やにおいはなかった。

本体の端の所にハシゴに似た垂直の板が立っていた。

アドヘマールがプラットフォームを歩き終わると、付き添っていた男がハシゴを一緒に降りた。このハシゴは引込式になっているらしい。地上に降りてから男は地面に二つの輪を描き、始めに

一つの輪を指さして、次に空の方を指し示し、続いてもう一つの輪を指さした。ブラジルの一般農民と同様に無学な単純な農夫のアドヘマールは、その小男の仕草が何を意味するのか理解できなかったが、これは宇宙空間の二つの異なる惑星を示すきわめて初歩的な方法なのである！　しかも私が一度ならず強調したように、南米の農村の混血人が空想科学小説などを読んだりしているわけがない。しかるにこの大陸からこそ最も驚くべきUFOの目撃報告が出ているのである。南米の広大な奥地ほど良好な基地を提供している所は地球上どこにもないことを忘れてはならない。私がかつてアルジェンティンのUFOに関する記事を書いたときに述べたのだが、その国の北部にいる通信員が今年知らせてくれたところによると、その同国人の多くはアンデス山脈またはマットグロッソ高原付近、またはアルジェンティン沿岸の海底などに宇宙人が基地を持っていることを信じているという。コラル・ローレンセン夫人の著書〝円盤の大インチキ物語〟にも、ブラジルの中央部に円盤の基地があることをほのめかしている。

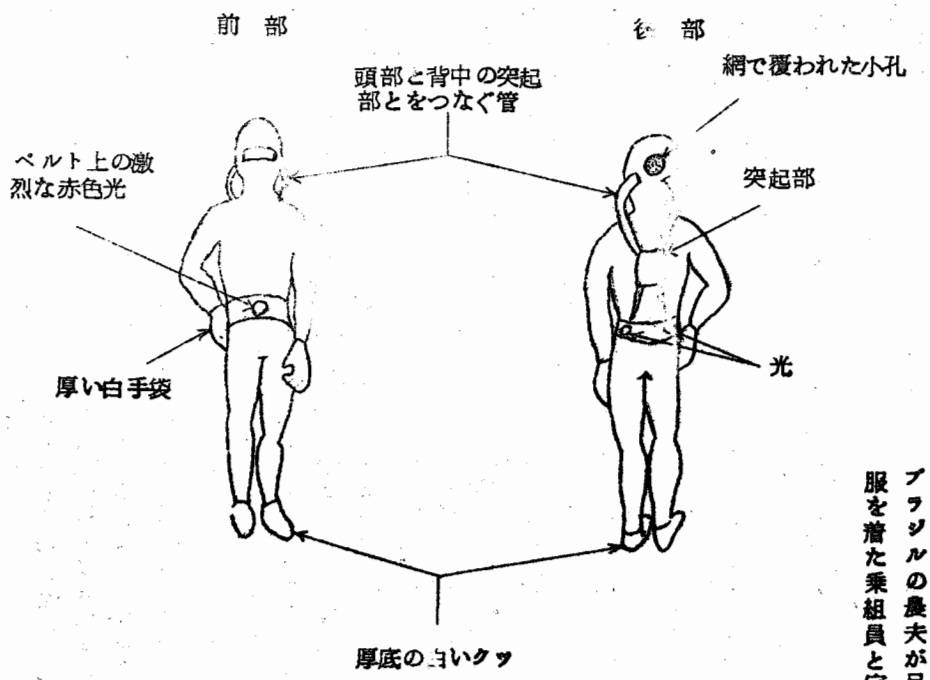
機体がまさに離陸しようとしたとき、アドヘマールは素早く後方へ退いた。前部の緑色光は目のくらむような白色光に変化し、信じられないほどのスピードで上昇して行ったが、この白色光だけがいつまでも目に見えていた。（これは殆どのUFO目撃例とは異なるものである）そして機体はあっという間に消えてしまった。

帰宅してからもアドヘマールはなおも吐き気をもよおしていた。そして続く三週間というものは肝臓が痛んだ。また顔や腕の皮膚に小さなハレモノができたが、これらはまもなく全治した。

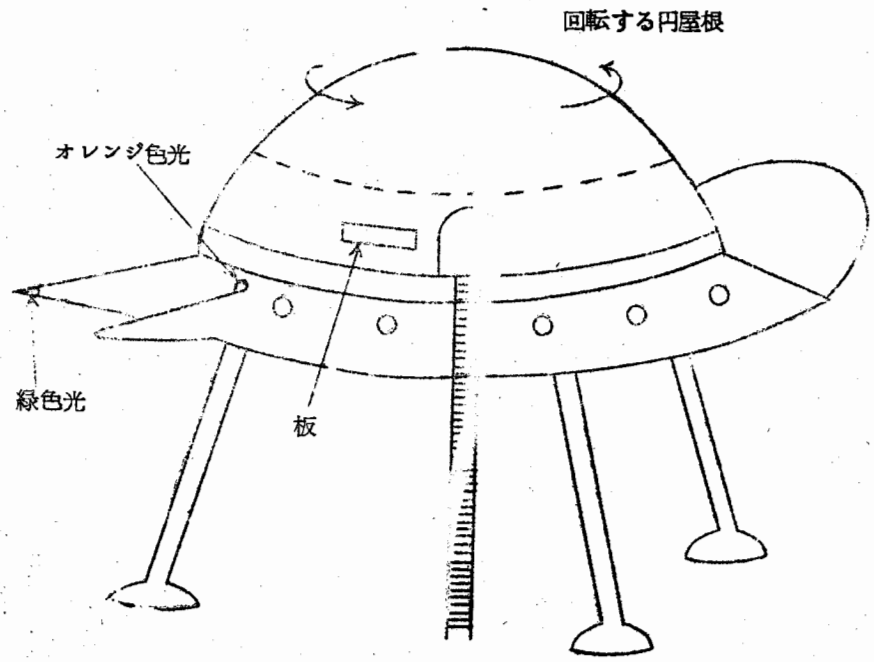
翌日トラクターを取りに行って彼はそれが完全に動くのを発見した。耕された柔らかい地面には乗員のカカトのない足跡や機体の三本脚の跡がはっきりと残っていた。ビューラー博士が指摘するように、これはアドヘマールの物語を支持するのに重要な証拠となるものであったから、調査しておくべきだった。ところがそれ以上の証拠となるのは、からだから血液を取られた際にできたあざの二つの痕跡だった。これは三年以上もそれとわかるように残っていたのである！

アドヘマールがビューラー博士らに語ったところによると、この事件のことはただ一人の人に洩らしただけだという。（おそらくリオで彼に尋問した官憲以外の唯一の人だろう）しかも二度の機会に—どちらも真夜中で、右の奇妙な体験より何ヵ月か前のことだが—彼の家は空中から宇宙船によって明るく照らされたことがあるという。一度の機会には彼の母もその〝照明〟を見たし、他の機会には家のまわりの囲い地が上空から照射された。これは就寝していたアドヘマールと弟とが目撃した。加うるにその村や近隣の人々も夜中に数度の機会にこうした閃光を見ている。

「もう一度こんな体験を持つとしたらどうするかね？」とビューラー博士がアドヘマールに最後の質問をしたら「別段興味は起こらないでしょう」と彼は恥ずかしそうに答えた。それは全く恐ろしい体験だったが、とにかく今はもう独身ではないのだ。「とはいうものの、同じ人間を乗せた同じ機械がもう一度着陸するならば、今度は逃げはしませんよ」と付け加えた。（英国の〝空飛ぶ円盤評論〟誌一九六五年一月・二月号より）




ブラジルの農夫が目撃した服を着た乗組員と宇宙船



# テレパシー開発体験記

一ノ瀬　稔

筆者一ノ瀬氏は本会々員で、真摯な若い研究家です。数年前よりアダムスキー著〝テレパシー〟の本格的な研究と練習を続けた結果、かなりの透視力、直感力等のテレパシックな能力を開発されたということで、迫力あるこの手記は「テレパシーは信念と練習によってだれにでも開発できるのである」という確信を必ず読者にいだかしめるでしょう。編者宛によこされた厖大な手記の内の一部を日付順にここに掲載いたします。（編者）

（昭和四十年二月二十四日付）さてここ数日来、非常に多忙でなんとか久保田先生の御期待に沿いたく思っておりましたところ、今日ひさびさに暇が作れましたので、是非とも私の体験を幾つかの例を通し、感想を通して綴ってみたいと思いました。大変心を侵害するような体験ですが、今日の日本においてテレパシーを本当に究明し、かつ生活に実際に応用している人は本当に極くまれであることを痛感しました。そこで先生が申されましたようにできるだけ統計的に記録致しますから、テレパシーを研究されている人達の、またこれから学んでいこうと思われる人達の為に、アダムスキー氏の言うところのテレパシー、生命の科学講座は全部正しいという証拠の為に、私の体験を資料として下されば幸甚の至りです。以下私の体験を語って参ります。

私がアダムスキー氏の著書〝テレパシー〟を読んだのは昭和三十八年頃と記憶しております。私は非常に興味を持ち、本格的にテレパシーの訓練に取り組みました。

私にはテレパシーの実験において一人の良き友があります。その人はここでは〝F氏〟としておきます。彼は非常にテレパシーに共鳴している人で、私にテレパシーの存在を知らしめた唯一の人でした。何故彼が私にテレパシーの存在を言ってきたのかと申しますと、彼は二、三年私とおつき合いしているうちに、私に一種の洞察力か感受性を持っていることに気付いていました。そこで彼がテレパシーの本を神田神保町の某書店で偶然にも発見し、私にそのことを教えてくれたのです。

こういうわけで彼もテレパシーの研究者なのです。私はよく彼の所に行き、アダムスキー氏のテレパシーの著書（以下テレパシーの書という）の中の練習法の第一の実験をやりました。

私達はテレパシーを容易に理解するためにいろいろと考えました。そこで浮かんできた考えは、私の心の中に信号機の赤、緑、黄、それに青の四色の色を鮮明に浮かべることでした。先ず第一にはっきりと心に思い浮かべるように二人とも練習しました。次第にはっきり浮かぶようになり、二人の間の意志表示は鮮明になってきた感じが私達二人の心にわき起こってきました。「これな

ら必ず言い当ることができる」と私達は思い、早速F氏に発信者になってもらって私が受信者になりました。

私は四官を統一するように心掛けて、体をゆったりさせて、心に何が浮かぶか暗示してみました。するとその瞬間〝赤〟の色が心に鮮明に浮かんできたので、私は「赤」と答えたのです。これは適中しました。又同じことを繰り返しました。黄、緑、青の順に私の心に浮かんできましたので、その通り答えたところ見事に全部適中しました。F君はびっくりしました。しかし有頂天になって私達二人はそれを何回も繰り返したため精神の集中により疲労をきたし、適中率が減少しました。私達二人は毎日といってよい位このようなことを繰り返してはテレパシーの書を読んで、自分の欠陥を見つけるように努力しました。

一年程過ぎて私達二人の間に交わされる波動は次第に一体性を帯びてきました。そうしている時、ある日私達二人は例の如く通信を交わしましたが、不思議な今日は期待していなかったような波動が私の体に波打って来たのです。F君が今までは赤、黄、青、緑、白、黒の六色の範囲で通信を交換していたところ、グレイ、すなわち灰色を思い浮かべたのです。私は「今のは妙に変わった感じがした。私の心にはグレイと浮かんだがどうだろうか」と質問したところ、その通りであるというのであった。私達は全くびっくりしました。しかしF君はグレイを英語のGreyでなく〝灰色〟という日本語で言ったのでした。又そう言いながら灰色を思い浮かべたのです。

その後数日過ぎて私達二人は例の如くテレパシーをやりました。F君は発信者ですが、この日はまた以前とは違った振動数を持つ波動なのです。何色だか見当がつかなかったのです。そうとは知らず私は自分の今までの確率を通していいかげんな感じで思いつきの色を言いました。全部はずれました。しかしF君は何を浮かべたのか全然私に言ってくれませんでした。ただ笑っているだけでした。そこで私は自分自身を見つめてみると、心が当てよう当てようと焦って集中現象を起こしているのに気付いておかしく思いました。それで一時間程休んで（雑談をする）また始めました。このときは実に印象は鮮明でした。F君は五つの色を浮かべました。それは連続的なものでした。それに対して私は「ホワイト、レッド、ブラック、ブルー、イエロウ」と英語で答えました。これは見事に適中しました。それと同時にF君の心境も随分変化するようになったことを私は認めました。

この種のテレパシーは特定の人の場合でしたので、私は今度は会社の人や学校の友人に対してやってみようと思い、会社で今年の二月二十四日軽井沢に旅行しました折、旅館に一泊しました。その夜八時頃より私は非常に気持のよい気分で湯から出て来ると会社の人達が私の帰ってくるのを待っていて、たちまち部屋の中に呼び入れられてしまいました。皆は非常に暖かい心の持主ですので、安心して仲間に入れてもらいました。しばらく雑談しているうちに皆がつまらなさそうにきょろきょろしだしたので、私は落ちついて「今から面白いことをやりましょう。しかしこれは遊びのような気持でいて、決してびっくりしてはいけません」と私は前置きしてから、F君のときと同じように会社の人達に一人一人やってもらいました。会社の人達は全部で八人で、男子二人（私を含む）女子六人でしたが、この時は不思議な事に私は気付い

たのです。

私は先ず三人の人を選びました。その人達の名を仮にT子さん、M子さん、O子さんとします。私はO子さん、M子さん、T子さんの順にテレパシーをやってみました。するとO子さんからの波動の印象の適中率は二〇％位でした。M子さんの場合は五〇％でした。しかし最後のT子さんの時はなんと一〇〇％の適中率でした。三人は口々に最初は感にたよって言っているのではないのかと質問してきましたので、私は「いや、O子さんとM子さんの場合は心の中にはっきりと色を浮かべていないのではないでしょうか。しかしT子さんの場合ははっきりと私は分ります」と言ったのです。その理由は三人の中で誰よりも落ちついていて、心が明朗な、会社の中のリーダーだったことに私は気付いたからです。そこで、では今一度T子さんに実験しますといって私は眼を閉じて精神を統一しました。するとなんとまたもや明りょうに〝赤〟と〝緑〟のどっちにしようかと迷っている心の状態が読みとれました。と同時にその人の心の本体の中まで見ることができました。名古屋の方に一人の男の友達がいて、ついこの前会って来たばかりであることが私の体を通じて私の脳の中心と思われる部分に印象がやって来ましたので、そのことも一緒に答えるとT子さんは全くびっくりしてそのときは二時まで皆と語り合いました。T子さんは一晩中眠れずにいたと言っていました。

楽しい、すばらしい旅行が終わって私達は普通の日常生活にもどりましたが、旅行の翌日から会社の内部の雰囲気が一変して、考えられない程に皆心が澄み切り、明るくなっていました。社長もことのほか感心していました。それ以来急速に私のテレパシーに確信がつき、仕事は能率よくはかどってきました。

今会社の人達で私がテレパシーの受信者であることや研究者であることを知らない人はいません。更に、悪い考え、恨み、気苦労、心配等の悪念を放つ人もいなくなってきています。こうして私は二月の大学（注。夜間部）の期末試験に突入したのですが、この試験の時にすらこのテレパシーは役に立ちました。試験は一月三十日から約一週間半ありましたが、私は非常に学校等の勉強をやっておりませんでしたので、心配でしたのですが、不思議なことに私の友人にはよき友がいて、いろいろと世話をしてくれたのですが、その友人はどうも会計学がニガテで、私に教わりに来たことがありました。私もよく会計学は理解できなかったのですが、最後の授業とその前の授業の二回出席して教師から感じられる印象を分析しましたら、その二回の授業は試験に出題される部分を明確に暗示していました。そこで友人に六つの問題を私は教えました。「これだけやってくれれば絶対に間違いはないのだから」と。試験の時にまさにその問題が出題されて私達は満点をとりました。この種の体験はあまりよくありませんが、勉強していない時でしたからやむを得ませんでした。しかし試験は一つの集中の激しい結果を生みますので、私は心と意識の混和状態を常に反覆していましたところ、私の勉強したところ全てが出題されましたのには自分ながらびっくりしました。私はこれを契機としてテレパシーの真実性をはっきりと認識したことはいうまでもありません。

## スキー場の事故を透視する

試験が終わって落ちついたせいか心にゆとりを見出し、私は友人をたずねました。彼はK君としておきます。K君は二月十四日かに湯沢スキー場にスキーをやりに行くと言っていました。そこでしばらく談話しているうち、私は何か不安な予感がしましたが、そのまま帰宅して寝ました。このK君は中央大学の文学部三年で、非常に物理、化学関係が好きで、きわめて常識的な人なのですが、テレパシーの存在を第六感としか解しない人で、私の言うテレパシーの書に対しては不信を持っている人でした。彼は私と会見した翌日スキー場に出かけましたが、私は例の如く忙しくて、彼のことを思い出すことができないまま三日過ぎました。帰宅してふと心が静まりかえると彼のことを思い出したのですが、やはり先日会った時の不安な気持がせまってくるのです。そのまま私は寝てしまいましたが、その翌日の昼少し前、K君の行っているらしいスキー場が私の心に鮮明に浮かんできて、そこにK君と、彼より少し高くてメガネを掛けた人と、もう一人の友人がK君を抱き起こしている姿が映りました。K君は前向きになって右寄りに倒れ、ネンザしたことがわかり、私のK君に対する不安が解消しました。そこで私は彼が今日帰っていることを思い出し、早速彼の家を訪ねましたところ、彼は食事中で一〇分程したら私の家へ行くから待っていて下さいというので、私は帰宅して大学イモとチョコレートを買って来て待っていました。やがて彼が現われたので、ゆっくり談話をしました。そこで私の感じたことを話しますと彼はびっくりして、気味が悪いと言いました。が、彼は別に私を変人と見る様子は全くありません。K君はつっこんで聞いてきました。「何時頃？」とか「晴れていたか？」「何人で行ったか？」「どんなふうな人か？」等々聞きましたが、私は全部心に映ったまま答えただけですが、それが全部適中しているのです。私は適中してもこの時はさして驚かないでおりましたが、K君は全くびっくりしていました。

以上のような体験が、テレパシーを研究してより二年足らずのうちに私の身中に起こった訳です。そして〝生命の科学講座〟を読んでより、更に一段と明解に自身の内部の意識に対して信頼を持つようになり、テレパシーも一層具体的な段階に突入して来たことがわかりました。

私が試験中に体験したのは言葉の単語を知って覚き、それがどのように自身の体内に影響を及ぼすか、又肉体と四官、センスマインドを構成する頭脳の細胞の働きとが完全一体となっていることが特に必要であり、完全一体となって、その状態で意識に融合していかなければいけないのではないかと実感するときがよく有るので報告しておきます。

このように私達の関心が内部の意識や広大無辺な宇宙の生命に（英知にも）向けられていけば、もはや悪念を放つことは極めて有害で、全体的に悪影響を及ぼし、又逆に入って来る悪念等を防ぐことになることを知りました。

生活をやっていく上において私達が注意しなければならないのは、精神統一の能力をより以上に高め、絶えず意識と一体であることを忘れずに行動していけば、本当にアダムスキー氏の言う通り、宇宙の絵巻の如く私達の生活が心よいものになり、環境が変わってきます。これは事実です。私はテレパシーを実践してきて感ずることは私の人間としての大きな変化であると思う。以前は

精神集中が激しく、だれと会ってもむっとして恐い顔をしていた自分が、現在は周囲の人達から以前とはまるで違った人間になったとか、随分ほがらかになった、一緒に生活をしていることが実に楽しみである等々の声が聞こえ、私も喜んでおります。しかしやはり四官の統一を乱す社会組織がある以上、これに打ち勝つだけの精神統一能力を維持しなければ、また前の古い考えが統一を乱し、再び絵巻が崩れて不幸をまねくことは事実です。忍耐の法則は絶対に必要であることをテレパシーの実験者に知らせておきたいと思います。実は私もこのことはしばしば起こるので特に書き添えたのです。

とにかくテレパシーの真実性を認め、確信をつかむことが第一で、自信がない場合は信念が欠けることですからテレパシーの受信は無理でしょう。

私は現在なんとかして意識から発せられる声を聞きたい、それが念願であります。私は以前にたった一度ですが、完全なるテレパシーができたことがあります　これは不動です。証券会社にいた頃のことですが、ある銀行へ何億という金を入金に行ったときです。私がいつものように通ろうとしたとき窓口の人が「入金は？」と言う非常にハッキリした声が私の全体に響いたのですが、そのとき「え？」と私は窓口の人を見て声を出した時、驚いたのです。それはまぎれもないテレパシーでした。耳で聞いたのでもありません。体全体でした。この体験あればこそテレパシーの研究に余念がないのです。

（三月二日付）先生から手紙を受け取った日、その朝、今日は手紙で返事が来るな、という反応を感じましたが、会社から帰ってみますとやはり手紙が来ていました。そこで早速ペンを取ってこれを書いております。

以前私が初めて先生に手紙を出しました折、私の紹介はしてあったと思いますが、ここにつけ加えます。

(1) 勤務先　東京都千代田区霞ヶ関一丁目一番地、巴商会（弁護士会館内）

(2) 学　校　東京都立戸山高校卒。東京経済大学四年（夜）在学中（商科）。高校では物理、化学、数学等に熱中

(3) 年　令　四月で二十五才（昭和十五年四月生）。独身

私は宇宙の意識から来る声は肉体の奥底より起こって来る（体全体に）ものと思っておりましたので、先生の回答で納得致しました。

テレパシーの書の中には、耳に聞こえるのと同様に、想念波動の受信も同じであるという意味の事が書かれていますし、又静かな小さな声を聞くようにしなければ真のテレパシーを理解することは難しいと言われておりますが、〝わき起こる感じ〟との関係はどうでしょうか。私は夜床に入るとしばらくして血液の流れを聞き、深々とふけてゆく夜の静寂が静かにりんりんとわき起こってくると、森羅万象の流転の中で太陽の光に輝いて一切の生命が生かされる姿が心に映ってきます。植物、特に種々の花が朝露にほんのりぬれて喜々として生ける楽しみを満きつしている姿を観るのです。そして何か静かに語りかけて来る感じがするのですが、これは参考になりませんか。

現在私は意識と一体になるために反覆の原理を応用しておりますが、これによって色々と体験しました。その詳細はいずれまと

めて書いてみたいと思います。

（三月七日付）待望のニューズレター一月二月号が到着致しました。アダムスキー氏の生命の科学講座を読み、私は大変驚きました。それは、アダムスキー氏の透視は私がテレパシーを実験していろいろと考え研究したことと全く同じ性質のものであることがわかったからです。私が二十三日付の手紙での透視の際私が一番懸念していましたのは、蓄積した個人的な観念をいかにして避けなければならないかということでした。何故なら個人的な観念は透視をする際に全くの障害なのです。勝手な想像をするからです。これは願望的思考でもあり、空想であるからです。正しい透視をするにあたっては絶対にそれらを避けねばなりません。私は以上の懸念される状態が全然なく、瞬間的に（時間が一致）K君のことを思った時に意識からの印象をセンスマインドがキャッチしてくれたのです。その時の体と精神の状態は無でありましたから有での状態といえましょう。理論的に説明すれば、全てのものと一体となっていたという感じです。苦痛も心痛もなく、血液の響きもなく、おだやかな流動体の中にセンスマインドがひたっていた状態でした。透視の実例、透聴の実例なら私はいくらでも持っています。私の周囲の人は皆知っています。今では皆関心を持ち、訓練をしようとはげんでいるのを私は見るにつけ、歓喜の波動を感じます。愛と信頼にみちみちた波動を。実にうれしいことです。アダムスキー氏の言われる全てが正しいことを私の体験から立証します。アダムスキー氏が言っていることは、意識を信じ、疑わずにその印象をセンスマインドにキャッチさせることであると思います。唯盲信的に意識のみを信じて従っていくことがテレパシーの奥底であることは間違いありません。

私は透視、透聴をやるためには、実のところ盲信的であり、四官を訓練すること日々に激しく、ある人から見れば気違いじみていると思われる位でした。それが二年続いた今日全く思いもよらぬ結果が生まれたわけです。テレパシーを実際の生活において生かすには隨縁真如の知、すなわち宇宙の英知の働きによることを付言しておかなければならないと思いました。

なお体験がふえましたので、四月頃には百枚程の手記となって先生の許にとどくと思いますが、よろしくお願い致します。

ニュートズレター一月二月号は全くすばらしい良書です。私の体から離しません。

又アダムスキー氏のテレパシーの書は何百回何千回読んでも読み切れるものではありません。私は絶えずこの書を持って離したことはなく、何か疑問が起これば必ずこれを読んで修正をします。それは即座です。又一切の思想、書物もテレパシーの原理から分別していくようになっています。テレパシーは私が修得した最大のもので、如何なる人もこれを打ち破ることはできません。

（三月十六日付編者からの質問にたいする回答）私はお酒もタバコもやります。お酒の方は一週間に一度位。ビール一本で、これは集中をほぐすためにやります。ということはまだ私も集中状態を起こすし疲れを生ずるからです。タバコは一日平均二十本すっていましたが、最近ではテレパシーの障害が大になってきましたので、昼二本、夕方一本、会社の帰りに一本等、一日に五、六本程度にしております。障害の主な例は胃に出ます。すると体全体に不快の念を起こさせ、テレパシーの効果を半減させます。セ

ンスマインドがそれをひどく重視するために心の緊張を作ります。テレパシーが完全に完成されるならば、自然にこれらは不必要になってしまうでしょう。

（注。以下は当方の姿を遠隔透視されたいという依頼にたいする回答。適中している個所には○印を、不適中の個所には×印を付した）

先生に対して遠隔透視のテレパシーを試みてみましょう。先生はメガネをかけた（○）、中背の人でしょう（×）。たいして肥ってもおりません（×編者の身長は一メートル八〇センチ。肥満型）。メガネのふちは黒茶です（○）。客人の来訪の時はネクタイは右ななめの黒と白のスジ入り、コンのもあります（×）。仕事をする際はワイシャツにネクタイか、仕事着を着てやるのではありませんか（○）。仕事場もちょっと映ったのですが、英文タイプ、和文タイプの機械があって（○）、並べておいてあり（×）、先生の奥さんと思われる婦人が一人おります。背丈は先生と同じか少し高い（×ただし小柄ではない）。ややほっそりした美しい人で（×）、メガネはかけていないようです（○）。二人の間はいつもなごやかである様子（×）。又仕事が終わって六時から七時まで食事をし、それ以後は会員からの手紙を読んだり返事を書いたりしております（○）。奇妙なことに、よくハンテンを着た寝巻姿で何か考えている状態が私の心に映るのですが如何ですか（×編者は和服を好まない）今年の正月頃か去年の暮ですかよく分りませんが、何かの宗教団体から、その一員と思われる人から、自分とこの教義はアダムスキー氏の教義と同じである等々の手紙が来たと思いますが如何ですか（○）。

以上の程度にしておきます。適中しておれば幸い。不適中なら何度も成功するまで楽しく試みるだけです。決して焦る必要はないからです　又私は慢心しているのでもないからです。慢心程テレパシーに害になるものはないからです。

私の友人がスキー場で負傷したときの透視の状況は、周囲の現実の環境は目に見えておって、スキー場の光景が透明なガラス絵を見るように見えました。ただし私はテレパシーの際に種々の色を相手の人に浮かべてもらっていますので、カラーが自分の肉体内をセキズイを中心としてスーッと上がって、頭の中枢部、第三の目といわれるような部分、アダムスキー氏によればスクリーンに連続的にパッパッと反射して映ります。それが透視の際には非常に拡大されるということです。ですから映画のスクリーンを見ているようだと言えば言えるでしょうが、透明なガラス絵を見るといった方があたっているように思います。何故ならスクリーンを見ている場合は疲れを生ずるからです。透明なガラス絵を見ているような場合は全然疲れず、いつまでも見続けることができます。スクリーンを見るように見る場合は、目をつむっているときにそう感じます。

テレパシーは努力さえすればたしかに誰でもできると思います。ただ忍耐さえあり、焦らなければよいと思います。自分の体内の想念活動に関心さえ持っていればテレパシーの能力は伸びると思います。物事を重大視しないで、気楽に当てる練習を相互にやるならば容易にできるでしょう。センスマインドが緊張するのは大体物事を重大視し、焦るためであるからです。

（三月二十五日付）私の先生に対する透視の適中率はおそらく

三割から四割程度だったと思います。

さて最近数日の間に米ソ両国より衛星船の打ち上げが成功致しましたが、C・A・ハニー氏の言う通り、UFO情報が一般に知らされる時期であると共に、いよいよテレパシー時代に入って来た感が致します。

最近の私の体内にわき起こるものは〝テレパシーを広めよ、伝えよ。それが自分の役目だ〟というものなのです。又〝先生に一度お目にかかっておきたい〟ということなのです。何もテレパシーを広めるといっても十字軍戦士のようにやる訳ではなく、このニューズレターが隔月刊誌から月刊誌へと進歩することで足りると思うのです。その手伝いをしてみたいと思っているのです。又四月上旬に先生宅へ訪問致す計画がありますので、ぜひともお宅への地図とその他の詳細をお知らせ下されば幸いに存じます。

最近の社会にはいろいろの圧力団体があり、そのうずの中に入ると進歩していたテレパシーは集中のために急激に半減して、人間本来の成長を止めてしまいます。まことにゆがみ切った社会であります。テレパシーが広く知られていくならば、これらのゆがみは全く解消していくことは間違いないと思います。現在の人々はいたずらに自分の半身に逆らうようにいろいろな事をやり、内部分裂を起こしているために如何なる人も不快感を持っていることは明らかであり、それがやがて自分自身の崩壊を余儀なくされていくことは明らかであります。

そう私は思いますので、テレパシーに関する体験はどんどんご報告致しますので、それに対するご返事は必ず頂きたいと思います。

以下は今月の始めに書いた体験記です。ところで、やはりカゼとか心配事がまま生じたときはテレパシーは全く狂ってきます。テレパシーができる時とできない時はすぐに分ります。テレパシーができないときは大抵の場合自分自身の内部に障害があり、特にひどいときは思想が一つのものに執着しています（集中です）。以下述べる体験は右の場合を除いたときに起こったことです。それから言い忘れましたが、テレパシーのできないときは、アダムスキー氏のテレパシーの書を開いて、自分の欠陥の参考になると思われる部分を必ず読みます。すると大体自分の欠陥が分ります。テレパシーの書はいつも内ポケットに入れておきますので、いつでもどこでも読めます。このことを付言して体験に入ります。

三月一日、私は朝会社に出勤し、ふと考えたことは、仕事中でも「私は意識と一体である。意識と一体である」と反覆してみようと思いたち、その日から三日間連続的にやってみました。不思議なことに（これは決して焦ってやったのではありません）三日目の朝、たしか十時頃だと思います。仕事中でしたが身体がすがすがしく、頭がさえてきました。すると非常におだやかに内部に起こる流動体（おそらく意識の海でしょう）の中に自分自身が溶け込んでいる実感がわき起こって来ました。すると次々と自分でも考えてもみなかった言葉がわき起こってくるのです。その時の私の顔は紅顔でつやつやして、見る人が全てふり向く位でした。（会社がひけて帰りの電車の中で証明された）それからしかも仕事は正確に運ばれ、まるで仕事と他の別の世界との二つの世界に同時に住んでいるようでした。私の仕事場（机のある所）にはタイプの出来上がったものが運ばれてくるのですが、（11頁へ続く）

# 金星人とは

G・アダムスキー

私のこれまでのコンタクトは主として金星人と行なわれましたので、ここで金星人の人間関係や態度を地球人のそれと比較してみましょう。

彼らは自然界を詳細に研究し、〝宇宙の父〟が母なる惑星の物質を生み出し、万物に〝宇宙の息〟を吹き込み、それによって万物が成長して互いに役立ち合っているのであることを知っています。彼らはきわめて感受力が高いために、草の葉の鼓動や岩石の呼吸を感じ取ることができます。彼らにとっては全人類は〝宇宙の息〟の現われであり、その〝息〟が各個人に生命とエネルギーを与えているのです。

彼らは樹木、草花、岩石、小鳥、動物などを研究し、これらが創造された目的を遂行している有様を観察していますので、〝自然〟とは神自身の法則の働きであるという結論に達しています。したがって自然界は至上なる英知の母であるといってよいでしょう。至上なる英知が現われるのはこの母を通じてであるからです。母体が、はらんでいる小さな幼児に必要な栄養を供給するのと同様に、母なる自然はその母体から生まれる万物の必要物を供給します。

こうした観察によって彼らは地球人よりもはるかに〝父〟とその目的とをよく知っているのです。

『出生』　彼らの子供たちは、常に以上の点を考えにおいて受胎され、育てられ、尊敬されます。彼らが生み出すように特権を与えられている一つの新しい肉体は、それ自体が限りない体験を経てきていることを彼らは知っています。そして肉体という神殿の中の〝住人〟を神の原理の現われとして尊敬します。受胎は愛のなかに行なわれ、婦人の妊娠期間中は性行為は避けられています。しかるに地球ではこのような慈愛の念は払われず、行為が続けられるために不具者が生まれたりします。

『幼児期』　幼児がきわめて小さいとき、その心は周囲の環境からあまり多くの印象を感受しません。その人体の内奥には〝生命の火花〟から放射される概念と感覚とがあります。そしてその肉体の作り手である〝全包容的英知〟は自由な状態にあります。金星の両親はこのことを知っていて、子供たちから多くを学び取るのです。

『生まれかわり』　或る子供は土星からやって来て金星で生まれかわるかもしれません。これは本人がそれまで知らなかった生命の或る分野を学ぶためであり、また各惑星人の知識が均等になるのを助けるためです。これは地球でも行なわれていて、この太陽系のあらゆる惑星上で体験を持ってきた人々が地球で生まれかわっており、それぞれ地球の進歩にたいして知的に文化的に科学的に貢献しています。

金星の住民は自分の意志を子供に決して押し付けようとはしま

せんし、子供たちを自分の型にあてはめようともしません。各人はそれぞれの運命をになっていることを彼らは知っていま[illegible]の指導や世話はしますが、その人格に干渉しないのです。親に何事か起こった場合は社会が子供の世話をします。彼らの社会は一大家族として互いに密接に結ばれているからです。したがって両親なき子供も両親との離別感を起こしません。

『日常生活』　こうした態度によって彼らの家庭生活がどのようなものであるかはおわかりになると思います。彼らはわれわれと同様に日常の雑用をやりますが、仕事の殆どはその目的で作られた機械によってなされます。一例をあげますと、家屋から出るゴミを集める機械があります。そして集めたゴミを外へ捨てないで容器の中へ貯えておきます。それを更に大工場へ運び、そのゴミの中から無機物を選り分けます。彼らは何物をも浪費しないのです。

われ[illegible]地球人の誤った考え[illegible]と努力してきました。彼らはわれわれを理解しています。なぜなら彼[illegible]去において心を訓練し、個人的自我を他人への奉仕径路に転換させる必要があったからです。彼らは自分自身よりもむしろ全体の改善に関心を持っています。彼らは楽しい人々です。それは単なる気分的な楽しさではなく、仕事を立派になしとげたことからわき起こる内奥の喜びです。彼らは万物や万人にたいして最大の敬意を払います。美しい建物の基礎に必要な地面を準備する人は、壁に壁画を描く画家と同じほどに高く尊敬されています。あらゆる人が相互に助け合っているのが社会であることを彼らは知っているのです。

『尊　敬』　この地球ではすぐれた人物であると思われる人だけを尊敬し、ありふれたミゾ堀り人夫を軽べつの目をもって見ます。しかし金星人の万物にたいする見方は異なります。彼らが絵を描いたり像を作ったりする場合は、使用する材料にたいして高い敬意を払い、それが生きものであると考えます。そして作った物すべてに自分自身の生命力の一部をしみ込ませます。彼らが作った彫像はあたかも生きていて話しかけるように見えます。それを見れば、製作者の個人的満足感は表われていません。

絶えず宇宙のエネルギーを知覚し、それによって生きている金星人が年をとらず、肉体の病気にもかからない理由をわれわれが理解するのは容易だと思います。彼らは医者を必要としません。というのはだれもが肉体の構造や働きを熟知しているからです。事故で骨折しても本人はその傷を治すことができます。彼らは肉体を母なる惑星の材料から出来た衣服とみなし、その衣服が各人の個別[illegible]現のために貸与されていると考えています。

われわれが肉体と呼んでいるこの衣服は長いあいだ愛用され、その有用性と美しさを保ちますが、新しい衣服を持つならば更に好都合です。新しい肉体が組み立てられるときは、そこに集まる細胞は各自の体験を有していて、各細胞の原子の中には記憶が保たれています。それによってその肉体の所有者は人体の体験から得るところがあるのです。私はこのことを〝テレパシー〟と題する著書の中で説明しました。

『死』　金星人は右の事を知っていますので、新しい肉体を得るためには時機が来ると喜んで古い衣服を脱ぎ捨てます。ゆえにわれわれの言う〝死〟という現象を彼らは恐れません。宇宙は絶

え間なき変化の状態にあることを知っているからです。彼らが他の惑星へ移動する（生まれかわる）ときは、その惑星の材料から作られる肉体が与えられ、それはその世界の条件によく適合していることを彼らは知っています。それは一軒の家から新しい家へ移動するのと異なりません。古い肉体の化学成分は目的を果たし、再び利用されるために別な変化過程に入ってゆくことを彼らは知っているのです。

『歴　史』　金星人は彼らの〝記録された歴史の図書館〟の中に太陽系の全惑星の記録、すなわち惑星の構造、文明の興亡、住民の科学技術や文化の発達などの記録を保存しています。

彼らが語ったところによりますと、この地球上には多数の記録文書が残されているということで、それは広大な知識の貯蔵庫となっていたのですが、これらの文書は破損したり散逸したり、記号類から文章に何度も翻訳されたり各国語に訳されたりしているうちに元の意味を完全に失ったということです。こうした太古の文書は簡単なわかりやすい説明で、物体の創造、惑星や太陽系の発達や変化、人間が〝宇宙の父〟と一体となって生きていた〝エデンの園〟の真の意味などが述べられていたのです。また人間が自我を強大にすることによって〝宇宙の因〟から自分を分離させるときに起こる実例の詳細な説明や人間の堕落と文明の破壊などの発生例もありました。また放蕩息子の帰宅の物語に述べられた永遠に許す〝父〟、すなわち〝宇宙の英知〟の真の意味や、そのとき息子が本来の生得権を再び得たという説明などもありました。

こんな記録はわれわれの聖書にありますが、その真の解釈法は失われています。人間が次第に貪欲になり、大衆を自我の支配下に置こうとして、元の記録を自分の都合のよいようにねじ曲げてしまったということなどをもっと詳細に私に説明できればと思います。しかしこれは必要ないでしょう。というのはこうした利己主義の結果をわれわれは現在あらゆる面で見ることができるからです。

惑星人はこの種の考え方や慣行の結果が終局の破壊に至ることを知っていますので、われわれの誤った態度を指適することもできます。このことは過去に何度も行なわれたのであり、警告によって、滅亡した各文明はそのせまいカラを破って一惑星としてでなく、太陽系の一員としての特権を享受する好機を与えられたことがあるのだということです。」

『発　達』　金星人といえども過失をおかすことはあります。これは以前に述べましたように、人間の心の発達の限界を一〇〇％としますと、金星人のそれは約二〇％です。ゆえに彼らも過失をおかすわけです。地球人は多くの過失をおかしてしかもそれを繰り返しますが、金星人は過失を卒直に認めて再び繰り返しません。しかもそれによって何かを学び取ります。彼らは自分の体験をわかち合います。絶対に他人の行為を非難しません。

『金星人の精神生活』　他の惑星の人間は地球人がやっているように神を礼拝するか、教会のような礼拝の場所を持っているのかと多数の人が質問します。」金星人は草の葉にさえ現われている〝至上なる英知〟を絶えず知覚して生きているということはこれまで説明し尽くされたと思います。

或るとき母船に乗り込んで私はスクリーンに投写された彼らの〝映画〟を見ましたが、これはテレビに似たもので、画面には彼

らの建物の一つが映っていました。入口に通じる巾の広い階段があって、地球の美しい大寺院の本堂に似た長い室の奥には、大きな壁に〝無限の生命〟を表わす肖像画がありました。それは息詰まるような光景でした。その肖像が生命で震えていたからです。この〝宇宙の生命〟の輝かしい肖像の暖かい抱擁の中に立ったときほど神に近づいたという感じのする時は他にないと思います。この建物の内部では宇宙の驚異や、宇宙の英知によって促進される〝宇宙の働き〟の完全な同等活動などについて研究されています。ところが地球人は〝礼拝〟という言葉の真の意味を理解するようになるにはまだまだ遠い道を歩まねばなりません。

金星では黄金が豊富に使用されていますので、古代の予言者たちが黄金でできた〝天国の門〟とか〝黄金を敷きつめた道〟という説明をしているところをみますと、どうも彼らは金星へ行ったことがあるのではないかという気もします。それとも金星から来た人が地球人の生活法と彼らのそれとを比較して描写するために〝天国〟という言葉を使用したのかもしれません。

『金星の家屋と公共建築物』　家屋の構造や大きさの相違は地球と同様に金星でもさまざまです。金星人もやはり建築や家具の型にたいする趣味や好みを持っているからです。各人の住む地域は職業によって決まりますが、これも地球と同様です。

彼らは美にたいして心中に深い観賞眼、というよりも殆ど畏敬感というべきものを持っていますので、これは彼らの肉体、衣服、家具、家屋の構造などに反映しています。彼らの仕事の材料は柔らかい優美な色を帯びて震動していますので、それらは生きているように思われます。

彼らはおだやかな人々ですから、けばけばしいものや極端なデザインは彼らの調和した生き方に適合しません。

草花、樹木、カン木、ツル草などが豊富に生長していますので、これらは色彩やデザインの美をこらすためのヒントとされます。

かつて私がメキシコの熱帯地方の河に沿って旅行していたとき、そこの景色を見て私はブラザーズが語ってくれた金星のみずみずしく繁茂した青草を思い浮かべました。金星には多量の水分がありますので、風景を美しくするのに殆ど手を加える必要はありません。美しいプールや優雅な彫像、草で覆われた公園や台地などすべてが生活を楽しむためのものとして多く見受けられます。

金星には多量の黄金がありますが、金星人はそれにたいして金銭的な価値を与えていませんので、建築物の装飾品として自由にしかも巧みに使用されています。黄金で作られた帯状彫刻壁の像や模様が、建築物の用途を示すために外面に取り付けられています。

石板が建築材料として多方面に使用されています。水晶が大きく切られて使用され、これは美麗映の板として理想的ですが、透明な壁面構造ではありません。彼らは石を研磨して宝石の表面のようにする簡単な方法を発見していますので、これが建築に応用されると材料の石は宝石のように見え、高度に磨かれるためにさまざまの色を反射します。

『食　物』　われわれはよく食物の専門家から「人間は食物によって体質が決まる」と聞かされていますが、私ならば「人間は自分の考えによって体質が決まる」と言いたいところです。肉体の中に摂取する食物の化学反応は各自が感じるとおりの結果を起

こします。ただしこれは個人的な事であって、一般的に規定することはできません。しかしわれわれが食物を食べるときの感情の状態は、栄養分の吸収とエネルギーへの変形に際して重要な要素となります。

私がこれまでに会った惑星人のなかに、彼らの食物にたいする態度を詳細に説明してくれた人がありました。彼らは一定の条件下の化学物質の反応や、人体の細胞、絶え間なく変化する細胞の交代に必要な〝燃料〟などについて広範囲な研究をなしとげているということです。

再度申しますと、彼らは地球人よりもはるかに恵まれています。というのは金星は土中に適度な水分やミネラルを含んでいて、それが作物に生命を与えていますので、その惑星は生産においてまだ処女地帯であるといってよいほどの状態にあるからです。必要な物すべてを巧みに自然が補充する有様をよく理解している彼らは、自然界と共に調和して働くことができるのです。しかも彼らは作物の生産を強行しません。こうして土から貴重な栄養物を取っています。

彼らは食物を料理する場合もありますし、生のまま食べることもありますが、彼らは食物の基本的な栄養素を破壊することなしに料理する方法を知っています。また肉体の適当な機能を果たすのに必要な炭素を補充するため、充分な肉類を食べます。私は〝空飛ぶ円盤同乗記〟を出してから後、彼らの食事の仕方について多くを知りました。彼らの一人が、異なる各種の食物を摂取することの重要性を説明してくれたのです。

【言　語】　多数の人を輸送する巨大な宇宙母船に乗ったとき、私は惑星人が彼らの言語で話しているのを何度も聞いたことがあります。それはカン高い調子の音楽的な話し声で、そのことを最もうまく表現すれば、澄んだ美しいフルートの音色に似ているといってよいでしょう。騒がしい声ではなく、気分が浮き立つような陽気な声です。

彼らの話し言葉でさえも音声の中に現われるあらゆる生命の感じを伝えています。彼らはまるで小鳥の歌、木々の間に流れる風の音、水流の歌うようなさざなみの音などを捕えているかのように思われるからです。

しかし彼らにとっては想念や感情を他人に伝えるのに必ずしも音声による会話は必要ではありません。彼らはきわめてすぐれたテレパシーの能力を有していますので、無言のまま互いの想念や感情を感じ合うのです。大体に音声による会話を行なうためには先ず心の中に想念を起こすか、またはイメージを描く必要があります。すると相手はその想念と一体化することによってその想念の波動と同じ周波数を持つために心中のイメージを見ることができるのです。発信者が何を言おうとしているのかを知るのに音声に頼る必要はありません。

私が彼らに会ったとき「私はジョージ・アダムスキーです」と自己紹介する必要はありませんでした。彼らは私を知っていましたし、またこの地球上における私の目的や、最善を尽くして私が彼らや地球人のために奉仕しようとしていることなどを熟知していたからです。また私が生命の目的や宇宙の広大な概念などを他人に伝えるためには、私の信念や確信を証拠だてるために或る種の体験を持つ必要があることも彼らにわかっていました。そこで

さまざまの体験が私に与えられたのであって、それは私が権威者の一人として認められるためではなく、人類のためのよき奉仕者たらんがためです。

一方この地球ではきわめて多くの種類の言語が使用されていますが、これは不幸なことです。というのは、翻訳などしているうちに元の意味や感情が失われて誤解が生じるからです。金星人がやっているように、地球人も各人がテレパシーの何たるかを理解してそれを応用するならば、右の困難は消滅し、想念との真の一体化というものが知られるようになるでしょう。

本来生命の本質というものはきわめて容易に理解できるものなのですが、地球人は種々の名称を付しては分類し、分割できないものを切り離したりして、ものの考え方を複雑にしています。宇宙のあらゆる部分が相互関係にあり、別個に機能を果たすことはできないという知覚に達しない限り、われわれは結果の世界の中でもがき続けるだけで、〝因〟すなわちあらゆる現象の青写真を理解することはできません。

『リクリエイション、ゲームその他』 あなたは尋ねるかもしれません。「金星人はいつも厳格なしかめ面をしていて、人間の神性を表わすことばかり考えているのではないか」と この質問の後半の部分については「そうです」と答えましょう。なぜなら彼らにとっては、宇宙の英知は常に自由な状態にあって、妨げられない行為の喜びを表わしているからです。しかし彼らは厳格なしかめ面をしてはいません。

『ダンス』 彼らの音楽は宇宙の各現象の波動の記録であって、それらは完全な調和の中に響き合って、喜ばしい表現の伴った一大シンフォニーを作り上げています。彼らがダンスをするときは肉体細胞が、常に若さを保つ絶えざる喜びの自由な状態の中に解放されていることを知っています。それでダンスをすることは〝宇宙のエネルギー〟にたいする礼拝または感謝のかたちであると考えられています。その〝エネルギー〟が永続する生命を表わす特権を彼ら人間に与えているからです。これは彼らの肉体のあらゆる動きを音楽のリズムと一致させることによってなされるのです。この地球上で原始的な生活をしている土人たちの多くは、惑星人の行なうダンスの本来の目的の記録をまだ保っています。しかし大抵の場合、土人はその踊りに含まれている創造の秘密までも表わすことはできませんし、そうしようともしません。われわれは他人の感情を無視して自分の個人的意見や感情を日常生活に表わそうとする限り、きわめて制限されたエネルギーと理解力の範囲内にとどまらねばなりません。

金星人はわれわれと同様にあらゆる種類のスポーツやゲームを楽しみます。また宇宙船で航行中はカードや他のゲームをやったりします。

『政 府』 これまでたびたび述べましたように、この太陽系内の他の惑星群には、一惑星に一種類の評議員団があって、あらゆる問題を調整したり、各地域の必要品を世話したりします。彼らは地球にある如き法律を必要としません。なぜなら、彼らの個人的な倫理観がきわめて高度なために、もし彼らが自然の法則をおかすようなことがあれば、ただちにそれに気付いて過失を修正するからです。評議員団の中には老若いろいろいます。また宇宙を旅する人たちもいて、他の惑星上で発生している出来事を観察

していています。こうした知識の交流によって彼らは絶えず宇宙について多くを学んでいるのです。

『惑星上に起こる諸変化』　この交流によって彼らは太陽系内の各惑星で発生している自然の諸変化に気付いています。彼らはこの地球が或る一大変化すなわち自転軸の傾きを体験する運命にあることを知っていますが、それが発生する時期については知っていません。しかし彼らは地球上で発生する変化を観察することに興味がありますので、完全な地軸の傾きが起こるならば、何らかの方法で地球人を援助するでしょう。私は長いあいだ「多数の惑星人がこの　球上に住んでいる」ととなえてきました。、そのために次のような質問を数限りなく受けました。「彼らは地球上で何をしているのか？」その行動の一つは、彼らの多くは出身惑星と絶えず連絡していて、地球が体験しつつある諸変化を観察しているのです。

一方、火星、金星、土星、木星などから発進した宇宙船は地球の上空を絶えず飛びまわっていて、大気圏内の磁力線の変化を彼らの装置に記録しています。また各惑星では同似の変化が彼らの惑星上で発生したときに作られたグラフがあって、このグラフと地球の変化とを比較することによって、地球の内部に発生する物事を探知することができるのです。地球の科学者は一九五七年と五八年の国際地球観測年を通じてその変化に警戒的になっていて、観測を延長する必要があることを感じています。その変化は急速なために、新発見事を比較して記録する前に諸状態はすでに変化していたからです。

他の進化した惑星から隣人が地球へ来るのは、地球人を楽しませるのでもなければ、新しい宗教を始めるためでもありません。彼らは神ではないからです。国際地球観測年の観測をするために異郷の地へ派遣された地球の科学者以上に、別な人々が現地の人々を救援するために派遣されたのです。しかしこの隣人たちはこちらが受け入れさえするならば喜んで彼らの知識を伝えてくれます。しかし彼らは、地球人の生活態度が誤った前提に基づいていて、現状では自己破壊に至るほかないことを知っています。彼らの計画は遠大であって、すばらしい原図ができています。彼らは地球人の疑惑をとがめません。なぜなら、彼らはいつかは地球人の空想のディレンマが真実のために解消することや、地球人はいつか心というものを実際的な考えのために用いるようになるであろうということ、そして神秘主義は自然の法則の理解によって置き代えられるであろうことを知っているからです。

## 急告

UD（宇宙研究同好会）第一回総会を七月十七日（土）に都内で開催致します。出席御希望の方は至急本会へ御連絡下さい。案内状を差し上げます。

## ―編集後記―

◎ ジョージ・アダムスキー氏はついに他界しました。人間である以上いつかは古い衣を脱ぎ捨てねばならぬのです。死という現象を別に悲しむ必要もないのでしょうが、いささか寂りょうを感じるのは人の子としてやむを得ないことです。ところでア氏の死去に関して国内の某UFO団体が虚偽の情報を流していますが、死亡日時や場所等について正確には本誌に掲載した通りです。こうした攻撃や嘲笑をする人たちを当方は一切無視することにしています。なぜならこうした人々もいつかは皆死なねばならぬのであって、その意味で万人は〝大自然の子〟であるからです。

◎ 本誌の冒頭に発表しましたように、本会は今後も一般円盤問題と宇宙哲学の研究活動を続けますからご安心下さい。頑張らねばならぬのはむしろこれからです。すでに或る構想のもとに本会は発展策を　中でして、手始めに右の急告通り七月にUDの第一回総会を開催することになりました。ふるってご出席下さい。

◎ 本誌の巻末を飾るアダムスキーの〝金星人とは〟は、昨年十二月にア氏がウィーンのドラ・バウアー女史に原稿を送り、ドラが複写して各国へ発送したもので、これまでア氏の唱えてきた惑星人問題を要約した手記です。本人は迫り来る死期をすでに予知していたかのように思われます。予感といえば、先号に一ノ瀬氏の手記を掲載する予定であったのを急拠変更してア氏に無断で金星旅行記を発表したのも、偶然ではなかったような気がします。最初の計報は本誌三月・四月号を発送した直後（四月二十九日）に到着しました。

◎ 〝テレパシー開発体験記〟の一ノ瀬氏はまれにみる熱心な研究家でありまして、去る五月一日に編者宅へ来訪され、二日間終始テレパシーについて論じ合い、氏の実験も親しく拝見しましたが、その能力は相当なものであったと申し上げておきましょう。来たるUD総会で同氏が体験をお話しになる予定です。またさらん実験も行なわれることと思います。

◎ 早稲田大学の学生森脇十九男氏が学内サークルの一環として〝宇宙円盤研究会〟を設立され、本会の外郭支援団体として発足されました。五月に機関誌第一号を出しておられます。ところで同氏は〝日本GAPニューズレター〟の第一号から第十五号までを参考資料として欲しがっておられますが、本会には在庫がありませんので、右をお持ちの方は同氏宛お貸し下されば幸いに存じます。住所は東京都新宿区戸塚町一の六〇七、柳井スガ子方で、この会の会長は田辺貞之助教授、会員は学生その他で計四三名となっています。

◎ 会員諸賢の絶大な御援助により何とか維持できまして厚く御礼を申し上げます。しかし今後の運営については予断を許しませんので、寄金は如何ほどでも歓迎いたしますから、よろしくお願い申し上げます。（久）


日本GAPニューズレター　1965　5月・6月号

翻訳編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP（別称・UD）
島根県益田市益田古川
振替・松江　二六三〇
（久保田八郎個人名義）

通巻第28号

昭和四十年六月十日発行
―隔月刊―

頒価一三〇円・送料二〇円
☆一ヵ年分送料共九〇〇円